

# 特別活動指導における「共感力」と「認識力」の重要性に関する一考察

—教職課程を学ぶ学生の意識分析を通して—

## A Study of the Importance of Empathy and Cognitive Abilities in Instructing Extraclass Activities

—By analyzing the awareness of the students in a teacher-training course—

藤原 健剛\*

FUJIWARA, Kengo

Competencies developed through extraclass activities are gaining attention as “Twenty-First Century Competencies” for overcoming these unpredictable times. However, we cannot expect any large educational effects, if the teachers themselves do not have the competency to understand the usefulness of extraclass activities.

Therefore, in this research, I conducted an analysis on the awareness of the students taking the “Extraclass Activity Instruction Method” class. As for the analysis method, first I enquired the lectures in which the students had lasting impressions and wished to utilize in their own classes in the future. Then, I categorized those by content, extracted the main components, and narrowed them down to the common elements.

In addition, I compared the differences in the students’ impressions of the lecture contents between both the day of the actual lecture and the day of the final class. As a result, I confirmed the importance of “empathy” and “cognitive abilities” as competencies for understanding the importance of extraclass activities. Hereafter, we, the instructors in charge of the “Extraclass Activity Instruction Method” class, realized from this research the necessity to develop effective teaching materials in cooperation with school teachers and provide instruction for our students.

**Keywords** : Extraclass Activity Instruction Method, competency, awareness analysis, empathy, cognitive abilities

---

\*甲南大学経済学部・教職教育センター教授

**要旨：**予測困難な時代を逞しく生き抜くための「21世紀型コンピテンシー」が検討される中、特別活動によって育まれるコンピテンシーが注目されている。しかし、指導する教師自身に特別活動の有用性を理解するコンピテンシーが乏しくは大きな教育的効果は期待できない。

そこで、本研究では特別活動の有用性を理解するコンピテンシーとは何かを探るため、特別活動指導法を学ぶ学生の意識分析を行った。分析方法としては、まず学生が特別活動指導法の全講義を通して最も印象に残り、且つ教師になったときに生かしたいと考えた講義内容を取り上げた。そしてそれを講義内容ごとに分類し、続いて学生がその内容を選んだ判断要素を抽出し、さらにそれらに共通する要素を絞り込んでいった。また、学生が選んだ講義の実施日と学期末の両日において、その内容の受け止め方にどのような違いがあったのかについても比較検討した。その結果、特別活動の有用性を理解するコンピテンシーとして「共感力」と「認識力」の重要性が確認された。今後、われわれ特別活動指導法の担当者は、この「共感力」と「認識力」を育成するために、現場の教員と連携して効果的な教材を開発し、学生を指導していく必要があることが本研究から明らかになった。

**キーワード：**特別活動指導法、コンピテンシー、意識分析、共感力、認識力

## 1 はじめに

現在、文部科学省もOECDも、さらにはわが国や諸外国の研究者の多くが、2030年頃の時代を予測困難な時代と見ている<sup>1)</sup>。その様な時代にあっては、コンテンツ（内容）・ベースの「何を知っているか」にとどまらず、コンピテンシー（資質・能力）・ベースの「どのような問題解決を現に成し遂げるか」が重要となってくると指摘する<sup>2)</sup>。

2003年、OECDのDeSeCoが一旦、キー・コンピテンシーの3つの広域カテゴリーとしてまとめたコンピテンシー概念<sup>3)</sup>を、現在、OECDや文部科学省<sup>4)</sup>、さらには東京学芸大学<sup>5)</sup>、東京大学などが中心となって2030年に向けての所謂「21世紀型コンピテンシー」として再定義しようとしているのは、予想以上の時代の移り変わりの速さを意味している。

その様な中で、集団活動と体験的活動を特徴とし、人格形成を目指す特別活動<sup>6)</sup>は、日本が伝統的に得意としてきた教育分野であり、「Tokkatsu（特活）」として「21世紀型コンピテンシー」を育成できるのではないかと期待が高まっている<sup>7)</sup>。

日本特別活動学界<sup>8)</sup>では、木内隆生が近年の先行事例を端的にまとめたように<sup>9)</sup>、下田好行の特別活動を指導するための実践的力量養成を目的とした講義の試み<sup>10)</sup>、林義樹の学生自身の自主性や

実践的態度を育成する参画型の授業実践<sup>11)</sup>、長沼豊・林幸克らによる模擬行事実習（日曜日、4×90分相当）を中心とした集団体験的授業<sup>12)</sup>など多くの研究者による科学的実践的研究を、その成果として蓄積してきた。

その中で筆者が特に注目したのは、下田好行と長沼豊・林幸克の研究である。下田は「講義に対してよい印象を持ち、特別活動に対して興味を抱くようになれば、やがて教師になったときに特別活動に対して前向きに取り組めるようになるのではないだろうか。」と考え、講義終了後に講義に対する学生の評価をアンケート調査し<sup>13)</sup>、それを分析して大きな研究成果を挙げた。また、長沼・林は「特別活動を特別活動的に学ぶ」<sup>14)</sup>ために模擬行事実習という全国的に見ても先駆的、独創的な試みを行った。そして、3度の学生への調査を実施して学生の変容を定量的に分析、学習効果について検証することで非常に大きな研究成果を残した<sup>15)</sup>。

筆者はこれらの先行研究の成果を踏まえつつ、教師が特別活動の有用性を理解するコンピテンシーとは何かを探るため、両研究のアンケート方式と分析方法に変更を加えて考察を試みた。アンケート方式については、あらかじめ設定した質問項目に対する5段階評価等での選択制ではなく、比較

的自由な記述式とした。また、分析方法も学生の文章をもとに意識分析を行い、分析段階を内容から要素へ細分化していくを試みた。教職課程を学ぶ学生を、将来の教師とみる立場は下田と同じであり、学生の意識変容に着目したのは長沼・林と同じである。

筆者が指導者である教師のコンピテンシーに焦点を当てた理由は、下田と類似する要素はあるが、指導する教師自身に特別活動の有用性を理解するコンピテンシーが乏しくては大きな教育的効果は期待できないからであり、在るものは教えられるが、無いものは教えられないという発想に根差しているのである。

以上のことを背景に、筆者は教師を目指して特別活動指導法を学ぶ学生の意識分析を行った。対象人数は多くはないものの、分析の結果、特別活動の有用性を理解するコンピテンシーとして「共感力」<sup>16)</sup>と「認識力」<sup>17)</sup>の重要性が確認された。本研究が、われわれ特別活動指導法を担当する者に対して、この「共感力」と「認識力」を高めるための効果的な教材を開発し、それをさらに更新しながら学生を指導していく必要があることを提示できたのではないかと考え、ここに研究結果を報告する。

## 2 研究の目的及び方法・手順等

### (1) 研究の目的

特別活動の有用性を理解する教師のコンピテンシーとは何かを探り、そのコンピテンシーを鍛え、高めることで、児童・生徒の特別活動における成果を最大限に引き出す。

### (2) 研究の方法等

#### ○研究の方法

特別活動指導法を学ぶ学生の文章をもとにした意識分析。

#### ○研究の対象

A大学の特別活動指導法履修者全員

第1クラス30名

第2クラス58名 計88名。

### (3) 研究の内容・手順等

#### 調査1

実施時期：学期末（7月下旬）

形式：記述式

内容：質問は以下の通り。

「特別活動指導法で学習した内容（講義内容、資料、班発表、DVD、講演等）で一番印象に残ったものを取りあげてそれを説明するとともに、教師になったときにどのように生かすかについて具体的に述べなさい。」

#### 手 順

- ①上記質問に対する回答から、学生が特別活動指導法の全講義を通して最も印象に残り、且つ教師になったときに生かしたいと考えた講義内容を取り上げる。
- ②講義内容ごとに分類する。
- ③学生がその内容を選んだ判断要素を文章から抽出する。
- ④それらに共通する要素を絞り込む。

なお、全15回の講義内容は以下の通り。

第1回：[講義]オリエンテーション(特別活動の位置づけ)

[演習]最初の2時間ホームルーム

第2回：[講義]現代における人間形成と特別活動

[演習]資料を基にした討議(省略)

第3回：[講義]特別活動の歴史の変遷

[演習]資料を基にした討議(省略)

第4回：[講義]学習指導要領と特別活動

[演習]構成的グループエンカウンター①  
(概要説明、企画案作成)

第5回：[演習]構成的グループエンカウンター②

(企画案の説明、一部実施、質疑応答)

第6回：[講義]特別活動の基本的な性格

[演習]資料を基にした討議(省略)

第7回：[講義]特別活動の意義と目的

[DVD]兵庫県立B高等学校の取り組み

(生徒会を中心とした全校を挙げてのボランティア活動)を通して<sup>18)</sup>

第8回：[講義]特別活動の領域と内容

[演習]資料を基にした討議 (省略)

第9回: 卒業生講演会 (A先生)<sup>19)</sup>

第10回: 特別活動指導実践 (指導案作成①)<sup>20)</sup>

第11回: 特別活動指導実践 (指導案作成②)

第12回: 特別活動指導実践 (班発表①)

第13回: 特別活動指導実践 (班発表②)

第14回: 特別活動指導実践 (班発表③)

第15回: [講義]特別活動の課題と展望

[演習]杉田洋「ある少年の物語と特別活動」<sup>21)</sup>  
を基にした意見交換

## 調査 2

**実施時期:** 第7回講義でボランティアのDVDを  
観た直後 (5月下旬)

**形 式:** 記述式

**内 容:** DVDを観た感想文。

**手 順**

- ①DVDを観た感想文から調査1の③・④と同様の手順で要素を絞り込む。
- ②講義の実施日 (5月下旬) と学期末 (7月下旬) の両日において、その内容の受け止め方にどのような違いがあったのかを比較する。

## 調査 3

**実施時期:** 第9回講義におけるA先生の講演  
直後 (6月11日)

**形 式:** 記述式

**内 容:** 講演会の感想文。テーマは以下の通り。

- ・授業を受けて感じたこと、気づいたこと
- ・教師になるために必要な力

**手 順**

- ①講演会直後の感想文から調査1の③・④と同様の手順で要素を絞り込む。
- ②講演会の実施日 (6月11日) と学期末 (7月下旬) の両日において、その内容の受け止め方にどのような違いがあったのかを比較する。

なお、本稿では、講義実施日における分析は、感想文等資料が整っている内容 (第7回・第9回講義) に限定した。

## 3 結果・分析

### 調査1について

#### 【調査1の①及び②】

ボランティア	26名	
A先生講演会	10名	
班発表	26名	
杉田洋先生	5名	
エンカウンター	5名	
その他	16名	計88名

ここで、学生にとって最も印象に残り、且つ教師になったときに生かしたいと考えた講義内容が頻度とともに示された。

上記講義内容のうち、ボランティアについて調査1の③を実施すると次の結果が得られた。

### ボランティア

#### 【調査1の③】

- a1 ここまで生徒が成長することに感動した。(2)
- a2 「ありがとう」と言われることで得る小さな成功体験が生徒を育てていくことに感動した。(1)
- b1 ボランティア活動の効力に共感した。(3)
- b2 生徒の一生懸命さが伝わってきた。(2)
- b3 ボランティアをしている生徒がいきいきして見えた。(2)
- b4 小さな成功を繰り返すことにより、自己実現につながっていくことに共感した。(1)
- b5 この取り組みはすばらしい。(1)
- b6 お互いに助け合う体験をできたのがよかった。(1)
- b7 自分たちができることを実行した。(1)
- c1 ボランティア活動を通してこんなにも生徒がいきいきするのかと驚いた。(1)
- d1 生徒がボランティア活動を通して、自己有用感と自信を得たことが理解できた。(6)
- d2 ボランティア活動で生徒の精神面での成長が期待できる。(2)

- d3 特別活動の運用の大切さが理解できた。(1)
- d4 ボランティアに対する考え方が変わった。(1)
- e1 特別活動の重要性を再認識した。(1)

ここで、その講義内容を選んだ判断要素が示された。同じ意味の記述については文末の(数字)で人数を表している。

次に、ボランティアについて、調査1の④を実施する。

#### 【調査1の④】

上記の文頭にaがついている文は、「感動」という共通する要素を持ち、bは「共感」の要素を持つ。「感動」は「共感」が増幅されたものである。

cは「驚き」の要素を持ち、dは「想像しにくかったことを受けとめることができるようになった」もので「新たな認識」の要素を持つ。「驚き」は「新たな認識」の増幅されたものである。また、eは「一般的にそのように言われているが、本当の意味で理解できていなかったことを理解できるようになった」、所謂「再認識」に分類され、広義の「新たな認識」に含まれる。

したがって、「感動」3名、「共感」11名、「驚き」1名、「新たな認識」11名(「再認識」1名を含む)であった。

以上のような「感動」「共感」と「驚き」「新たな認識」(広義)は資質・能力としてみた場合、それぞれ「共感力」と「認識力」になる。これらは、学生がその講義を選んだエッセンスであり、特別活動の有用性を理解するコンピテンシーであると解される。

したがって、ボランティアにおいてはコンピテンシーとしての「共感力」は14名、「認識力」は12名の頻度で表れた。

以下同様に、A先生講演会、班発表、杉田洋先生、エンカウンター、その他についてそれぞれ分析すると次のようになる。

### A先生講演会

#### 【調査1の③】

- b1 学年が下だから負けて当たり前という気持ちではなく、下剋上してやろうという気持ちに導いた先生は素晴らしい。(1)
- b2 教員になったときは、先生の話の思い出しつつ、差別をなくす努力をする子どもを育成したい。(1)
- d1 生徒一人一人に原因(生活の背景)がある。私の考え方も変わりました。生徒一人一人を理解することの大切さがわかった。(1)  
〈括弧書きは筆者の補足である。以下同様。〉
- d2 知らず知らずのうちに自分の言葉が生徒への重しになり得ることが分かった。(2)
- d3 生徒の生の声を敏感に感じ取る必要がある。(1)
- d4 (外国籍であることの表明があった際に)「あ、そうなんだ」と軽く捉えてしまった自分の無知を恥じた。(1)
- d5 (生徒からの衝撃的な言葉でも嬉しいというように)物事をポジティブに考えることはなかなかできないことなので私も参考にしたい。(1)
- e1 生徒一人一人の特徴をしっかりと理解し、その生徒の家庭状況も把握して適切な対応をとっていきたいと、当たり前のことではありますが、そう考えています。(1)
- f1 20代の若い先生が学校現場でどのような仕事をしているのかがわかった。(1)

#### 【調査1の④】

b2は講演の内容を共感的に受けとっている。d1とe1は同じ内容の話を、d1は「私の考え方も変わった」と「新たな認識」として理解しているが、e1は「再認識」として受けとっている。また、f1のように「共感」「新たな認識」のどちらにも属さない第三者的な感想も見られた。以後、「感想・意見」をfで示す。

したがって、講演会については「共感」2名、「新たな認識」7名(「再認識」1名を含む)、「感想・意見」1名であり、コンピテンシーとしての「共感力」は2名、「認識力」は7名に表れた。

### 班発表

#### 【調査1の③】



全5回を使った学生参画型・実践型の講義であることから、印象に残り、且つ教師になったときに生かしたいと考える学生はボランティアと同じ26名を数えた。

内容的に多岐にわたるので、ここでは主な記述を挙げる。

- c1 発表のときまでは、自分たちの中で良いものができたと考えていたが、発表後の質問や問題点についての話合いで、自分たちの想像していなかった問題点やおかしな点があったことを知り、驚いた。(1)
- d1 実際案を発表すると多くの意見、質問が飛び交い、指導案が穴だらけであることに気づいた。(1)
- d2 指導案について多くの意見が出れば出るほど取捨選択し、より濃いものができることを学んだ。(3)
- d3 生徒全員に対して行う学習が差別的でないか、傷つく生徒がでないかということ、様々な場合を考慮しなくてはならない。特に資料ではその配慮が欠けてはいけなと感じた。(2)
- d4 先生に(校外で)清掃活動を行う際の留意点を教えていただいた。それは教員が真面目に清掃しすぎないことであった(没頭してしまわない)。私は、教員は行動で示すべきだと考えていたため不思議に思ったが、生徒のことが見えなくなるという理由を聞いて納得した。(1)
- d5 発表後すぐに、直接たくさん意見をもらおうというところまで行う講義はめずらしいと思う。(1)
- e1 今一度、実践することの大切さを実感した。(1)
- f1 特別活動の指導案の作成や発表や発表後のディスカッションの全てにおいて印象に残った。(1)

#### 【調査1の④】

班発表については上記記述を含み、「驚き」1名、「新たな認識」24名(「再認識」2名を含む)、「感想・意見」1名であった。学生が生徒目線ではなく、教師目線で特別活動について考えたのは初めてであると思われ、大多数は「新たな認識」であった。ここではコンピテンシーとしての「共感力」は見られず、「認識力」は25名に表れた。

杉田洋「ある少年の物語と特別活動」

#### 【調査1の③】

- b1 今、小学校にスクールサポーターで行っていますが、実際勉強も運動も苦手でも無口で内気な児童はよく目にします。(1)
- d1 教師の生徒へ接する態度、生徒へかける言葉一つで生徒の性格や未来を良いようにも悪いようにも変えてしまうことがあるのだと思った。(4)

#### 【調査1の④】

杉田先生の資料については「共感」1名、「新たな認識」4名。したがって、コンピテンシーとしての「共感力」は1名、「認識力」は4名に見られた。

#### エンカウンター

#### 【調査1の③】

- d1 クラスを一つにまとめるのに、構成的グループエンカウンターで自己理解、他者理解するのはとても良い方法だと思う。(3)
- d2 何も考えていないのと、事前に起きることを想定しておくのとでは、対応の質が全然違う(ことが分かった)。(1)
- f1 コミュニケーションをとるその手助けか、きっかけとして実施したいと思った。(1)

#### 【調査1の④】

エンカウンターでは「新たな認識」4名、「感想・意見」1名であり、コンピテンシーとしての「認識力」は4名に表れた。

#### その他

16名が「その他」に分類されるが、内容的に多岐にわたるので、ここでは主な記述を挙げる。

#### 【調査1の③】

- d1 子供に注意するときはダメなものはダメと教えること。理屈を言う必要はない。理屈を言うことで子供に理解をとることになってしまうからだ<sup>22)</sup>という先生の言葉は重みがあった。(1)
- e1 教科的な指導力だけではよりよい学校生活を生徒と共有することはできないと改めて気が付いた。(1)

f1 私が教師であれば、やり直しまは指定をして決め、約束を守ることの重要性を指導すると思う。(1)

#### 【調査1の④】

その他については、上記記述を含み「新たな認識」13名（「再認識」1名を含む）、「感想・意見」3名であった。したがって、コンピテンシーとしての「共感力」は見られず、「認識力」は13名に表れた。

次に、学生の意識変容を見るために、調査1と同様の手順で調査2及び調査3を実施し、調査1と比較・検討する。

#### 調査2について

##### ボランティア

#### 【調査2の①】

主な感想は次の通り。

- a1 ボランティアの生徒たちが砂浜を掘っているシーンがありました。先の見えない作業を人のためにするという心に感動しました。(1)
- a2 私たちの世代の人たちが、ましてや神戸出身でもないのに、「恩返し」という言葉で東北にボランティアに行っている事実を知り、とても心動かされた。(1)
- a3 今までに聴いたどの「しあわせはこべるように」よりもいいもので、自然と涙が溢れてきました。(3)
- b1 人の温かみがよくわかった。(1)
- b2 ボランティア活動を通して、自分の存在意義を実感できたことはすごいと思った。(2)
- c1 震災が起こってそれほど時間が経っていないとても大変な時期であるにもかかわらず、ボランティアに行こうと思える生徒たちの行動力に驚いた。(1)
- c2 最初、自分の学校は評判が悪いから誰も募金してくれないかもしれないと言っていたのに最後には誇りを持てるようになったと言っていて、短期間でこんなに変わるのかと驚いた。(2)
- d1 定時制に通っている子たちへのイメージがガラッと変わりました。(1)
- d2 感謝の気持ちに触れると人は変わるということを学んだ。(1)

- e1 今までいろいろな授業で、自己有用感を高めるためには何らかの体験活動が効果的であると何度も聴いてきたが、あまり実感がありませんでした。今日のB高校の発表を見て、今まで言われてきたことってこういうことか、と頭の中の霧が晴れたように納得しました。(1)
- f1 高校生は、現地の人たちのつらさや一人一人の無力さ、支え合う強さを感じたのだと思う。(1)

感動的なDVDの鑑賞直後であったために、出席者75名の内、上記記述を含み25名が「感動」、24名が「共感」した。「驚き」は6名、「新たな認識」は20名（「再認識」6名を含む）、「感想・意見」は10名であった（「感動」「共感」と「驚き」「新たな認識」（広義）の両方が見られる学生も10名いた）。したがって、ボランティアについてコンピテンシーとしての「共感力」は49名、「認識力」は26名に表れた。

#### 調査3について

##### A先生講演会

#### 【調査3の①】

主な感想は次の通り。

- a1 先生の中学生とのエピソードは聴いているこちらも非常に感動しました。(1)
- a2 体育大会の話では泣かされました。(2)
- a3 今までの講演会の中で一番感動したし、今日ここで講演会を聞いてよかったです。(1)
- b1 人間味のある内容で生徒に対する愛情や情熱が伝わってきて大変良かったです。(1)
- b2 教師はしんどいけど、辛いけど、その分だけ嬉しいことがあるし、感動することがあるんだなと思いました。(1)
- c1 先生の学生時代は部活も教職もスクールサポーターもして、とても活動的で驚きました。(1)
- d1 反教師的な態度を示す生徒でも、教師側があきらめずきちんと向き合い、寄り添い続けていくことで、生徒との信頼関係が築かれていくのだと思った。(1)
- d2 生徒の言葉や行動をそのまま受け取るのはよくないということに気づきました。(1)
- f1 今日は、生徒と楽しい時間をすごしたいと思われてい

るA先生がすごいなと思いました。(1)

土曜日に授業を変更しての講演会実施であったため出席者は58名であったが、情熱溢れる講演で、上記記述を含み「感動」9名、「共感」23名、「驚き」1名、「新たな認識」6名（「再認識」なし）、「感想・意見」21名であった（ボランティアと同様に「共感」と「驚き」「新たな認識」の両方が見られる学生が2名いた）。したがって、講演会当日、コンピテンシーとしての「共感力」は32名、「認識力」は7名に見られた。

調査1、調査2の①、調査3の①を、調査1を中心に表にまとめると【表1】になる。

①学生番号の1～30が第1クラス、31～88が第2クラスである。細字数字が文系学部の学生、ゴシック数字が理系学部の学生を指す。

②【表1】の右側は、調査1をもとに、学期末に学生が選んだ講義内容ごと、さらに共通する要素ごとに分類したものである。左側は「ボランティア」と「講演会」の実施当日の学生の意識を表す。

したがって、左側と右側の対比が学生の意識変容を示す。

③【表1】の左側では「感動」と「共感」、「驚き」と「新たな認識」は程度の違いと解して、棒グラフで色・模様分けして表した。単なる「感想・意見」は□で示し、欠席は「欠」と記した。左側、右側で色・模様の同じものは同じ要素を表す。

【表1】から次の結果が得られた。

(【調査2の②】・【調査3の②】の分析を含む)

①調査1では、全15回の講義の内、ボランティアと班発表が26名に選ばれた。班発表は5回分の講義(90分×5)を充てているのに対し、ボランティアは2本のDVDを合わせて17分足らずであり、映像の持つインパクトの強さが読み取れる。

②A先生の講演会は、土曜日実施のため参加学生

が少なかった(58名)にもかかわらず、参加学生の6分の1以上が学期末に選び、影響力の強さを示した。

③班発表、エンカウンター等は学期末においては「感動」「共感」の要素を持たなかった。

④ボランティアについては、学期末に「感動」「共感」を示した学生は全員、2ヵ月前の講義実施日にも「感動」「共感」を示している(表の10番から下53番までの14名の学生)。また、学年末に「驚き」「新たな認識」を示した学生も、ほぼ全員、講義実施日にも「驚き」「新たな認識」を示している(表の60番から下81番までの12名の学生。ただし、80番の学生は「感想・意見」であった)。

⑤ボランティアについて、45番の学生の例で、(講義実施日)「ボランティアという特別活動を通じて、生徒一人一人の確かな成長を目の当たりにしました。」(共感)

→(学期末)「このような一つの特別活動を通じて、ここまで生徒たちの心が育つことに非常に感動を覚えました。このことを踏まえ、自分が教師になった際には校外清掃を始めとするボランティア活動の機会を積極的に活用して、……参加を呼びかけていきたいです。」(感動)や、10番の学生の例で

(講義実施日)「私が一番感動したのは、「どうせB高は」「どうせ私は」とネガティブな気持ちが、ボランティア活動を通して、「誇りあるB高」「もっと頑張ろう」という気持ちに変化していったことです。」(感動)

→(学期末)「「ありがとう」と言われることで得る小さな成功体験が彼らの自己有用感を高めていきました。いつしか「どうせ私なんか」という考えが小さくなっていく姿にとても感動しました。」「私が教師になった時は、……小さな成功体験を積み重ねていけるような指導をしていきたいと強く思いました。」(感動)に見られるように、「感動」「共感」が学期末まで残った学生の多くは感動したこと、共感したことを、教師になったときに、そのまま実施するか、「小さな



【表1】

学生番号	5月下旬				6月11日		6月11日				7月下旬					
	ボランティア 感動 共感	ボランティア 驚き 新たな認識 (再認識を含む)	ボ 感想 意見	ボ 欠席	A先生講演会 感動 共感	A先生講演会 驚き 新たな認識 (再認識なし)	A 感想 意見	A 欠席			ボランティア 感動 共感 驚き 新たな認識 感想・意見	A先生講演会 感動 共感 驚き 新たな認識 感想・意見	班発表 感動 共感 驚き 新たな認識 感想・意見	杉田先生 感動 共感 驚き 新たな認識 感想・意見	エンカウンター 感動 共感 驚き 新たな認識 感想・意見	その他 感動 共感 驚き 新たな認識 感想・意見
10								欠								
43																
45																
3								欠								
6																
8																
9																
22																
24																
34																
40																
41																
49																
53								欠								
60																
2								欠								
35								欠								
52								欠								
54								欠								
64								欠								
65								欠								
70								欠								
78								欠								
79								欠								
80																
81																
15																
75																
1																
27																
38																
50																
58																
66																
77																
62																
23																
4																
7																
11																
12																
17																
19																
20																
25																
28																
29																
30																
42																
44																
46																
48																
55																
61																
63																
71																
82																
85																
86																
87																
88																
51																
37																
16																
57																
68																
69																
14																
21																
33																
83																
32																
5																
13																
18																
26																
31																
47																
56																
59																
67																
72																
73																
74																
76																
36																
39																
84																

成功体験を積み重ねる」というように意味づけして実施しようと考えている。ここには、特別活動の有用性を理解するコンピテンシーとしての「共感力」が強く認められた。

- ⑥ボランティアについて、54番の学生の例で、  
(講義実施日)「高校生というのは思春期ど真ん中で自己存在感や自己有用感が非常に不安定な時期である。その中で、自分を必要としてくれるということが感じられる場面へ身を投じることが、不安定な自己に自信を持たせることができるだけでなく、他者への理解により大きな影響を与えることができる。そういった点で、このボランティア活動という特別活動は非常に有意義なものだと感じた。」(新たな認識)
- (学期末)「被災地に限らずボランティアを行っていくことは、生徒たちの精神面での成長が期待できます。」「私は教師として、……多種多様なボランティア活動を準備します。そしてその活動を通じて自分たちは何を得たのか、しっかり理解させることで、生徒の成長を促していきます。」(新たな認識)とあるように、講義実施日において、「新たな認識」として受け取った要素が、学期末でもそのまま残り、教師になったときの指導指針としたいとするケースが多く見られる。これは新しい知見を自分のものとして取り込み、生徒のために役立てたいという「姿勢」と不可分であると考えられる<sup>23)</sup>。ここには、特別活動の有用性を理解するコンピテンシーとして、「認識力」が認められる。
- ⑦ボランティアでは、「感動」や「驚き」が2ヵ月後にそのまま維持されるケースもあったが、相当数は「共感」や「新たな認識」としてやや落ち着きをみせて意識に定着する傾向を見せた(それぞれ、6分の4と4分の3。ただし、45番の学生は、「共感」が2ヵ月後に「感動」として増幅されている)。
- ⑧講演会については、10名の学生が学期末に選んだ。この10名を講演会当日と比較すると、講演会当日に「感動」「共感」を示した6名のうち、学期末には2名が「共感」として残り、4名は

「新たな認識」に転換して意識に残った(27番・38番・58番・77番の学生)。これは「感動」「共感」が一般化されて定着したものと解される。その逆に、「新たな認識」が「感動」「共感」に転換する例は見られなかった。

また、講演会当日の「新たな認識」がそのまま残った学生が1名。「感想・意見」が「新たな認識」になった学生が2名(これは講演会当日の文章から「新たな認識」は読み取れなかったが、学生がその思いを持ち続けていたのであろう)。さらに、両日とも「感想・意見」であるが、一番印象に残ったとして講演会を選んだ学生が1名いた。

ここで、上記一般化の例として77番の学生を挙げておきたい。

(講演会実施日)「無視されるよりは、少ない言葉の中から(衝撃的な言葉ではあるが)コミュニケーションをとってくれているのが嬉しかった」というお話がありましたが、そのとおりでなあとと思います。」(共感)

→(学期末)「私も教員になったら、生徒一人一人の特徴をしっかりと理解し、その生徒の家庭状況も把握して適切な対応をとっていきたいと、当たり前のことではありますが、そう考えています。」(再認識)

⑨ボランティアと講演会のいずれにおいても、講義実施日に「共感力」と「認識力」の両方が確認できる学生がいる。学期末には、そのうちの一方が強く表出した。

⑩【表1】全体から、映像(ボランティア)による「感動」「共感」は長く保持される傾向が確認される。

#### 4 結論

本研究では、児童・生徒の特別活動における成果を最大限に引き出すために、特別活動の有用性を理解する教師のコンピテンシーとは何かを探った。特別活動指導法を学ぶ学生の意識分析を行った結果、特別活動の有用性を理解する要素として「感動」と「共感」及び「驚き」と「新たな認識」

(以下「広義」で使用)が洗い出された。これをコンピテンシーとして捉えた場合、「感動」と「共感」は「共感力」、「驚き」と「新たな認識」は「認識力」と解され、その重要性が確認された。

「共感力」は感動的な教材において表出することが多く、特に映像の場合、「感動」や「共感」が長く保持される傾向が見られた。また、「感動」や「共感」は時間の経過とともに個人の中で一般化され、「新たな認識」として定着する場面が見られた。一方、「認識力」の多くは新しい知見を生徒のために役立てたいとする姿勢と結びついて「新たな認識」として表出し、数量的に特別活動の有用性を理解するコンピテンシーの大部分を占めた。今後、われわれ特別活動指導法の担当者は、このような特徴を有する「共感力」と「認識力」を育成するために、現場の教員と連携して効果的な教材を開発し、次々とより有効なものに更新していきながら、学生を指導していくことが肝要となる。

## 注

- 1) 文部科学省 教育課程企画特別部会 「論点整理」pp. 1～2 及び「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」中央教育審議会、平成28年12月21日(以後「平成28年12月中教審答申」と記す)pp.9～11等を参照。
- 2) 奈須正裕「非認知的能力と生活教育に対する正当な評価への兆し」『日本特別活動学会 第25回大会研究発表要旨集録』p.17及び上記答申p.30注63等を参考にされたい。
- 3) DeSeCoプロジェクトは、3つの広域カテゴリーとして、「カテゴリー1」相互作用的に道具を用いる、「カテゴリー2」異質な集団で交流する、「カテゴリー3」自律的に活動する、を挙げ、さらにそれぞれのコンピテンシーの内容として「カテゴリー1」の下位に、A 言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる B 知識や情報を相互作用的に用いる C 技術を相互作用的に用いるを、「カテゴリー2」の下位に、A 他人とよい関係を作る B 協力する。チームで働く C 争い

を処理し、解決するを、そして、「カテゴリー3」の下位には、A 大きな展望の中で活動する B 人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する C 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する、を設定した。(ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著、立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』明石書店、2006年、pp.202-218)。

- 4) 日本・OECD共同イニシアチブ・プロジェクト(「平成28年12月中教審答申」補足資料(参考資料)p.91参照)。また、Education 2030プロジェクトでも我が国のカリキュラム改革は世界をリードする役割を期待されている(上記答申p.12及び補足資料p.92)。
- 5) 東京学芸大学は「OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトを立ち上げて、すでに平成27年度研究活動報告書をまとめている。
- 6) 中学校学習指導要領 第5章特別活動 目標「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」を想起されたい。
- 7) 平成28年8月26日付け「特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」p.2の「このような特別活動は、我が国の教育課程の特徴として、海外からも高い評価を受けているところである。」等を参照。
- 8) 平成4年2月1日設立、会長 長沼豊(学習院大学)、会員数462名(平成27年8月現在)の特別活動の充実、発展、奨励、普及に取り組む学会。
- 9) 木内隆生「学級・ホームルーム活動のカリキュラム構成と実践的指導法の開発—教職科目「特別活動の指導法」の基盤となる学問領域の拡大に着目して—」『日本特別活動学会紀要』第19号、2011年、p.33。
- 10) 下田好行「特別活動を指導する実践的力量養成に向けた講義の試み—教職専門科目「特別活動の理論と実践」における教育内容・方法の開発を中心として—」『日本特別活動学会紀要』第9号、2001年、pp.33-42。下田は、特別活動を指導する実践的力量の向上に結びつくような講義の教育内容・方法の開発を目指した。実践的力量については現場教師のアンケート調査から、「楽しく有意義な企画を生み出す力」と「子どもの内

面を見取る力」に絞って講義の中で養成していくことにし、イベント企画を考え、そのアピールのためのプレゼンテーションを行うという実習を設定した(p.34)。そして、そのイベント企画を含めた講義の分析を通じて、「学校現場に有効な知識・技術で構成した教育内容は、学生の意欲的な講義参加を促した。特に企画の立案とプレゼンテーションを行う実習は、学生の企画力や内面を見取る力の向上に貢献できた。」(p.41)とする有用な結論を得たのである。

- 11) 寶槻純子「21世紀に求められる特別活動の姿／参画と特別活動－武蔵大学教職課程『特別活動研究』における学生参画授業を通して－」上掲書、pp.62-67。
- 12) 長沼豊・林幸克「教職課程科目『特別活動の研究』の学習効果の測定」『日本特別活動学会紀要』第14号、2006年、pp.22-34。長沼・林は「特別活動を指導する教員に必要な資質・能力として、たとえば集団と個の相互作用を明確に意識し、集団への関わり方についての手法を理解し、社会力をもった市民的素養を掲げている。具体的には「集団を通した学び、体験を通した学び」という特質をもつ特別活動についての基礎的な知識・技能を理解・体得してもらうために、教員養成段階において「集団を通して学び、体験を通して学ぶ」場を提供している。」(p.22)として模擬行事実習という画期的な手法を用い、その学習効果について検証した。調査と分析は非常に精緻なもので、結果として、授業を通じて、集団指導・活動への関心・意欲が大きく向上することが特徴的な学習効果として挙げられ、他方で共感的理解や積極的態度といったもともと高得点を示していた側面が、顕著な向上を示すことはなかった等、効果と限界を明示し、さらに授業を行う集団規模による学習効果の差異の検討等を、今後の課題として指摘するなど(pp.32-33)、示唆に富む論考である。
- 13) 下田、前掲書p.34。
- 14) 長沼豊・林幸克、前掲書p.33。
- 15) 長沼豊・林幸克、前掲論文。
- 16) 「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～」国立教育政策研究所、平成27年3月、p.105にも関係形成を行う能力として「共感」があげられている。

17) 「認識力」について、本稿では「外部からの情報・刺激をもとに、新たな知見として把握する力」として使用する。

18) DVD (2本) のあらすじ

【その1】平成23年度兵庫県高校生地域貢献事業発表会(兵庫県立B高等学校 東日本大震災現地ボランティア活動等の発表映像 12分間)

兵庫県立B高等学校は多部制(定時制)の学校である。同校は東日本大震災からわずか2ヵ月後の平成23年5月9日、教員・生徒合わせて40名で、現地ボランティア活動を行うために東北に出発した。同校生徒の約2割の参加である。出発に先立ち、義援金を集めるために募金活動を行ったが、「私は最初、募金活動は嫌でした。B高は評判が良くないから、誰も募金をしてくれないだろうと思いました(生徒の言葉)」という心配をよそに、「頑張っってね。すごいね。」と市民に温かい言葉を掛けられ、市長からは「あなたたちは市民の誇りです。」と激励されて出発、東北で泥と粉塵の中で一生懸命片付けをして帰校した。その後、同校は台風による地元の水害の際に全校生で片付けを行い、また、多くの地域ボランティアにも出掛けていった。その様な中で生徒に自己有用感が芽生え、自信と誇りが育ち、自尊感情が高まっていった。そしてそれは生徒会活動や部活動の活性化、進学・就職への成果等、自己実現に結びついていった。以上のような同校生徒の成長を生徒自身が発表した感動的なDVDである。同校は平成23年度兵庫県高校生地域貢献事業発表会で最優秀賞を受賞した。

【その2】兵庫県立B高等学校 第2回東日本大震災現地ボランティア活動(4分30秒間)

平成24年7月、B高等学校は教員・生徒61名で第2回東日本大震災現地ボランティア活動を行った。砂浜の清掃と仮設住宅における交流が目的である。生徒は仮設住宅で、九死に一生を得た女性の話を真剣に聴いた。女性は南三陸町防災対策庁舎のすぐそばに家があり、「津波が来ます。逃げてください。」と最後まで放送を続けた女性職員の声で避難した。助かった後も多くの支援を受けて感謝していると話した。そして、限られた時間の中で、生徒は自分たちにできる精一杯の支援を行って帰校した。解団式での生徒の視線は、わずか4日間の内に以前とは全く違う強い力を持っていた。



なお、ボランティアについては、現行中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領の学級活動(ホームルーム活動)、生徒会活動、学校行事のすべての「内容」において記載され、その有用性が示されている。

#### 19)【A先生講演会の内容】

本学卒業生で中学校の教員に採用されて5年目のA先生の講演。A先生が最初に生徒に挨拶した際に衝撃的な返事が返ってきた。しかし、今となってはそのようにしてかかわりを持つようとしていることをむしろうれしく思う、という話や遅刻してくる子どもを一方向的にサボっていると判断してはいけない、弟を保育園に送り届けてから学校へ来なければならない子もいた。家庭背景まで知っておかなければならないという話。また、体育大会でクラス一丸となって頑張ろうと取り組んでいた自分が、実は生徒から気づかいされていたのではないかといった自問。問題の多かった学年の卒業式で感動のあまり大泣きした話。さらに自分が外国籍であることから研ぎ澄まされた人権感覚にかかわる話等、学生の心に訴えかける熱い体験談である。

20) 特別活動指導実践は、班編成を行い5回連続で実施した。第1クラス(30名)は一班5名で、全6班。第2クラス(58名)は一班4～5名で、全12班。それぞれに、中学校学級活動、中学校生徒会活動、中学校学校行事、高等学校ホームルーム活動、高等学校生徒会活動、高等学校学校行事を割り振り(第2クラスは2班ずつ)、生徒会主催球技大会、全校生地域クリーン作戦等、取り上げる内容は班で決定した。

1～2回は、班ごとに指導案(実施要項)を作成し、提出する。3～5回は班発表。第1クラスは一班30分の発表、質疑応答10分、第2クラスは一班15分の発表、質疑応答7分とした。

21) 杉田洋「ある少年の物語と特別活動」(『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化、2009年)を資料に、杉田氏の伝えたかったことについて意見交換する。

#### 【資料のあらすじ】

杉田氏は小学生のころ、引込み思案で、言葉少なく、おどおどした男の子であった。しかし、5年生の時に転機が訪れた。学芸会で行うクラス劇の主役を級友から振られ、何も言えずにうつむいていると、担任である大学出たての女性教員が「この子はできる子です。杉田くん

は必ずできます」と言ってくれ、その後も励まし続けてくれた。杉田少年は見事大役を成し遂げ、これをきっかけにものごとに積極的に挑戦するようになった。杉田少年は成功体験を積み重ねて、やがて小学校の教員になり、市教育委員会の指導主事を経て、ついには文部科学省に入り特別活動の調査官になったという、非常に感動的な話である。

22) この論については、藤井一光「公民教育研究―「子ども観」の変遷とこれからの学校教育について―」『甲南大学教職教育センター年報・研究報告書 2013年度』p.19を参照されたい。

23) 姿勢や態度については、平成28年12月中教審答申においても「学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養」として重視している(p.30)。